Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

近代中韓両国における明治小説『不如帰』の受容様相について ： 文学体制の視点から

竇, 新光

(Citation)
海港都市研究,9:127-145

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005496

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005496

近代中韓両国における明治小説『不如帰』の受容様相について

——文学体制の視点から——

竇　新　光
(Dou Xinguang)

Ⅰ　序論

1　問題の提起

近代（特に 1890 年代～ 1910 年代）の東アジア世界における、日中韓三国の文学的な繋がりは極めて緊密であった。それ以前は、交通が未発達であったことに加え、三つの封建王朝が鎖国政策を実施していたため、三国間の文学的な交流の頻度は決して高くなかった。その後も日韓併合、朝鮮戦争、冷戦の本格化によって中韓と日中間の直接な文学交流は長い期間（中韓は 1910 ～ 1945、1950 ～ 1992、日中は 1949 ～ 1972）断ち切られた。しかし、1890 年代から 1910 年代まで約 20 年間における日中韓三国は、相次ぐ対外開港と交通手段の進歩によって、急速に、頻繁な接触が可能になってきていた。文学の分野に目を移せば、明治小説が集中的に中韓両国へ伝播されるようになっていたのである。したがって、1890 年代～ 1910 年代は、東アジア三国間の文学交流と関係が最も緊密だった時代だと言っても過言ではないだろう。

この期間の文学の伝来経路は、中国から徐々に韓国と日本に伝播した古代と違い、日本で発表されたものがすぐに中国と韓国へ伝わっていった点が特徴的である。もっと具体的に言えば、近代の中韓両国が明治小説に触発されて、自発的に多くの作品を受容し始めたのである。明治小説の伝来は、当時の中韓両国の文学の新旧交代に重要な役割に果たしただけではなく、両国の社会にも大きな影響を与えた。

この時期、中韓両国が受容した明治小説はかなり多い[1]。筆者が、近代中韓両国における明治期小説の伝播に関するデータを統計したところ[2]、1890 年代後半から 1910 年代前

1　中国側の統計によると、1898 年から 1911 年まで中国で出版された日本の作品は 101 種があった［王凌 1986：54］。

2　この統計は、石塚由佳が 2012 年神戸大学修士論文「韓国近代小説における受容様相と女性像—趙重桓の作品を中心に」の中で、翻案小説に関する日本と韓国の近代作品を整理しまとめた「日韓翻案小説年表」を参照した上で、更に中国関係の作品関連情報を追加し整理したものである。

半まで中韓両国に導入された 43 篇の明治期小説の中で、大部分（30 篇）は中国（11 篇）か韓国（19 篇）のいずれかの国にだけ伝わったものである。中韓のどちらにも伝わったのは 13 篇しかないが、その中、ほとんどの作品は翻訳・翻案本が 2 種類ずつ（中国 1 種＋韓国 1 種）あるのに比べ、『不如帰』だけは 4 種類（中国 1 種＋韓国 3 種）の翻訳・翻案本がある。即ち、多くの作品は中韓両国のいずれかの国が受容しているケースが多く、中韓両国に受け入れられた作品は決して多くなかった。さらに中韓両国によって受け入れられた作品群の中において、中国と韓国の双方で大きな影響力を持ち得た作品はさらに少なかった。この意味において、『不如帰』は特に研究する価値をもつ重要な作品である。なぜならば、『不如帰』は近代の東アジアにおいて次々と国境を越えて、中韓両国で多様な翻訳と翻案本が出され、日中韓三国の読者によって広範に受容された作品だからである。もちろんこの期間、中韓両国に伝わった作品は『不如帰』以外にもいくつかあったが、その影響力は『不如帰』に及ぶものではない[3]。

このように、『不如帰』が東アジアの文学史の観点からも重要な作品であることは論を俟たない。そこで本稿では、この作品を比較文学的な視座から考察し、東アジアにおける『不如帰』という文学現象の一端を明らかにしたい。

2　先行研究の検討及び本研究の方向

これまでの日中韓三国における『不如帰』についての先行研究を国別に検討してみたい。

日本での『不如帰』に対する研究は自国における『不如帰』の作品分析が多く、比較文学的な考察が少ない。日本は 1950 年代には、［中村忠行 1957］など『不如帰』に対して比較文学的な関心を示していたが、その後 20 世紀末までの長い期間そのような比較文学的な研究は続かなかった。20 世紀初、日韓の視点から『不如帰』を扱う論文が幾つか出たが、これは韓国人研究者（［権丁熙 2001］など）が日本で発表したものだった。したがって、日本では海外における『不如帰』の受容に関しての注目が充分ではない状況にある。

中国では、中国語に翻訳された『不如帰』は、長い間研究者の注目を浴びることはほと

3　これに似た観点は以下のように指摘されたことがある。
「徳富蘆花の不如帰は日本近代文学の代表的な長編小説だ。（省略）。韓国と中国でも多様な翻訳・翻案本が出版され、演劇としても上演された。（省略）。韓中両国の観客すべてから歓迎を受けた日本作品は不如帰だけだったという事実がひときわ人目を引いている。」
(「도구토미로카의 호토토기스는 일본 근대문학의 대표적 장편소설이다 . (중략) 한국과 중국에서도 다양한 번역 / 번안본이 출판되었고 역시 연극으로도 상연되었다 . (중략) 한중 양국의 관객으로부터 모두 환영받았던 일본 작품은 이 호토토기스뿐이라는 사실은 분명히 눈길을 끈다 .」)
김종진 2008「도구토미로카 호토토기스에 대한 한국과 중국의 연극적 수용양상 비교연구」『중국어문논총』, P. 220.

んどなかった。『不如帰』に関して少し言及した論文や著作はあったものの、専門的に研究対象として『不如帰』を扱う研究はなかったのである。21 世紀に入って、［夏敏 2006］を起点として、『不如帰』に関する専門的な論文が書き始められたが、その数は少ない。中国では『不如帰』に関して研究が始まったばかりであり、主に二つの方向で行われてきた。一つは、『不如帰』が中国に導入された過程を紹介するもので、代表的な例として［夏敏 2006］、［邹波 2009］などがある。もう一つは、『不如帰』を中国の他の作品と比較する研究であり、［楚永娟 2010］、［劉海玲 2012］などがその例である。

韓国の研究は、中国よりもやや長くその研究蓄積もある。［신근재 1989］など、早くから『不如帰』を研究対象とする専門的な論文が出てきた。近代韓国における『不如帰』の翻訳・翻案本の種類[4]が多いので、韓国の『不如帰』研究の数も比較的多い。しかし、そのほとんどは、日韓比較文学的な視座から、韓国における『不如帰』の翻訳や翻案の様相を考察の中心に行われてきたものである。例えば、［洪善英 2002］、［권정희 2003］、［윤민주 2007］、［권정희 2011］などの成果がある。他に、［권정희 2009］、［표세만 2010］など、比較文学ではなく、日本の『不如帰』だけを考察した研究もある。

前述してきたように、『不如帰』は近代の東アジア三国で大きな影響があった作品であるにもかかわらず、現在まで三国における『不如帰』の比較文学的な研究はほとんど日韓か日中の二国の視点から進められてきている。東アジア全体の視点から『不如帰』という文学現象を考察する研究は、ほとんど行われてこなかった。［권보드래 2003］は三か国の視点で考察を試したものである。しかし、その論文で韓国側の三つのテキストの中の一つのみ（『杜鵑声』）が扱われており、韓国側の受容様相の全体像が把握されていない。それに、この論文の焦点となっているのは「近代的文学概念及び文学言語の成立」で、即ち文学理論の視点で考察したものであるので、他の視点から三か国の『不如帰』を再考察する必要があり、可能であると考える。

したがって、本研究では、こうした先行研究に基づきながら、以下のように二つの方向で論述を進めていきたいと考える。

第一には、近代東アジア日中韓三国における『不如帰』という文学現象の全体像を把握する。そのため、第Ⅱ章と第Ⅲ章では、『不如帰』が日本で登場し、それから近代中国と韓国に伝わった過程を整理し、近代東アジア世界で『不如帰』が流行した状況を全体的にまとめる。

4　第Ⅲ章でまた紹介するが、韓国における『不如帰』の翻訳・翻案本は 3 種があり、即ち『불여귀』『두견성』『유화우』である。

第二には、現在までまだ行われていない中国と韓国における『不如帰』の受容様相の比較を、文学体制の視点から試してみようと考える。そのため、第Ⅳ章では近代中韓両国における『不如帰』の受容様相の相違点を、受容の動機や方式や読者層などの文学体制的な視点から、分析してみたい。

Ⅱ　日本近代小説『不如帰』の登場

1　明治小説『不如帰』の創作

長編小説『不如帰』は日本明治時代の著名な小説家徳富蘆花（1868 ～ 1927）の出世作であり代表作である。この作品は初め新聞連載小説として 1898 年 11 月 29 日から 1899 年 5 月 24 日にかけて『国民新聞』に掲載された。翌年（1900 年）1 月には単行本として民友社によって出版された。『不如帰』は発表後、空前の反響を呼び、ベストセラーとなり、日本近代文学を代表する名作となった。

では『不如帰』はどのように創作されていったのだろうか。

まず『不如帰』が発表された当時の時代背景をまとめたいと思う。『不如帰』が登場した 1898 年頃の日本社会は、日清戦争が終結したばかりで、社会混乱と道徳の転落が著しかった。近代社会の開始と個人意識の台頭につれて、個人主義が伝統的な家族中心主義と対立し、家庭の問題は当時の民衆の注目をひく社会問題になっていった。重大対外戦争の推進、軍国主義政策の盛行、軍人崇拝の高まり、家族制度を巡る社会の葛藤、肺結核の蔓延、キリスト教の諸問題などは明治 30 年代の日本人が非常に注目していた社会問題であり、『不如帰』に詳しく描写・反映された。

このような時代背景の中で、作家徳富蘆花が『不如帰』を創作したのは実は偶然に仄聞した物語に深く感慨を覚え、そこから創作のインスピレーションを得たからである。後述する通り、『不如帰』の主人公には全てに原型がある[5]。作品の中の片岡陸軍中将は陸軍大臣大山巌で、浪子は大山巌の元妻が生んだ娘の信子である。大山巌の元妻が三番目の娘を生んだ時に亡くなり、大山巌はアメリカに留学し、日本の歴史上初めて大学学位を得た女性の大山捨松（つまり小説のなかの浪子の継母）と結婚した。男主人公武男の原型は、当時警視総監三島通庸の息子三島弥太郎である。肺結核を患っていた信子が死んだのは 1898 年、つまり『不如帰』が連載始まった年だった。徳富蘆花が 1898 年、海辺で休暇

5　江川瀾 2011：ネット C04 版 (http://sztqb.sznews.com/html/2011-01/25/content_1424748.htm (2013 年 3 月 30 日閲覧)).

を過ごした時、ある婦人が述べてくれたことに基づいて『不如帰』を創作し、『国民新聞』に発表したのである。

2　日本『不如帰』の内容

『不如帰』はその豊富な内容から、「家庭小説」にも「愛情小説」にも、あるいは「戦争小説」にも分類できる。『不如帰』のあらましは下記のとおりである。舞台は日清戦争の時代の日本、物語の主人公は、互いに愛し合いながらも家族制度のしがらみによって引き裂かれてゆく浪子と武男である。片岡陸軍中将の愛娘浪子は、実家の冷たい継母、横恋慕する千々岩、気むずかしい姑に苦しんではいたが、海軍少尉川島武男との幸せな結婚生活を送っていた。しかし武男が日清戦争へ出兵している間に、浪子が結核に罹ったことが原因で、家系の断絶を恐れる姑から離婚を強いられ、武男の留守中に離縁させられた。二人の愛情はとだえることがなかったが、救われるすべのないまま、浪子は、「もう二度と女なんかに生まれはしない」と嘆いて死んでいったのである。

3　日本における『不如帰』の影響

『不如帰』は発表後、広い読者を得た。『不如帰』の初版 1000 冊は一ヶ月で売り切れ、２年間で 10000 冊も売れた。1909 年までの 9 年間、単行本は 100 版を重ねている。徳富蘆花が亡くなる 1927 年までに 190 回も再版され、50 万冊以上が売られ、明治時代の大ベストセラーとなった[6]。中国の文豪周作人（1885 ～ 1967）も『不如帰』を

「蘆花的『不如歸』最為有名，重版到一百多次」[7]
（盧花の『不如帰』が一番有名で、百回以上再版された）

というふうに日本近代の三十年間で最も有名な作品だと評価した。

それに、『不如帰』が演劇にも改編され、新派劇の最高の作品として全国で上演された。大衆から熱烈な歓迎を受けて、連載小説から改編された演目のなかで一番多く上演された作品となった。小説と演劇によって『不如帰』は長い間大きな影響力を持ち続けていた。その時代の日本人で『不如帰』を読むか観覧しない人はほとんどいないと言われた。さら

6　藤井淑禎 1990：57.
7　周作人 1918.

には当時恋愛していた若い者たちはよく男の子が武男と、女の子が浪子と呼ばれた[8]。浪子のセリフも歌に改編され、広範に流行していた。それだけでなく、『不如帰』の続編を創作した様々な作品の出現からも、『不如帰』が持っていた影響力が窺えるだろう。

Ⅲ　近代中韓両国における明治小説『不如帰』の受容過程

1　近代中国における『不如帰』の導入及び影響

『不如帰』は、1908 年林紓（1852 ～ 1924）によって近代中国に導入された。林紓は中国清末民初の著名な翻訳家である。林紓は中国の古典小説に倣った文体で外国小説を翻訳した第一人者であるだけではなく、中国近代で最も活躍した翻訳家でもある。林紓は、甲午戦争（即ち日清戦争）の真相を全国に知らせる試みによって、日清戦争と関係が深い『不如帰』を翻訳し始めたのである。彼は助手魏易と一緒に、『不如帰』の日本語原典と英語訳本（『Namiko』塩谷栄と E.F. Edgett 訳、東京遊学舎、1904）を底本として[9]、文語文で翻訳し、漢字表記が原著と一致した書名（『不如歸』）で、1908 年に商務印書館から出版されたのである。

林訳『不如歸』は再版を重ね、大きな反響を呼び起こした。商務印書館は初版の後、再び『不如歸』を「説部叢書」の第二集第 23 編として、1915 年まで 4 回再版され、1913 年から 1923 年までで「小本叢書」シリーズに収められ、5 回再版した。1914 年から「林訳小説叢書」の第一集第 43 編として再版された。もっと興味深いのは、中国でも日本のように『不如歸』の続編が出たことである。商務印書館「説部叢書」第 2 集第 97 編の『後不如歸』がその中の一種である。

林訳『不如歸』は「近代中国社会に影響を与えた百種の訳作」に収められた[10]。林紓は

> 「余譯書近六十種，其最悲者，則『吁天録』，又次則『茶花女』，又次則是書也」[11]
> （私が 60 種近い小説も翻訳した。その中最も悲しく感じたのは『吁天録』、次は『茶　花　女』、次はこの作品である）

8　前掲［江川瀾 2011：ネット C04 版（http://sztqb.sznews.com/html/2011-01/25/content_1424748.htm（2013 年 3 月 30 日閲覧））］.
9　鄒波 2009.
10　鄒振環 2008.
11　林紓、魏易訳 1981：1.

というふうに、『不如歸』を自分が翻訳した作品群の中で一番悲劇性が強い三つの作品の一つと評価した。近代中国の読者たちが『不如歸』を読んだ感想がたくさん残されている。たとえば、侗生が『小説月報』で

「前年購得小說多種，中有「不如歸」，余因為日人原著，意未必佳，最後始閱及之。及閱　終，覺是書之佳，為諸書冠，恨開卷日晚也」[12]
（この数年間買った多くの小説たちの中に「不如歸」があったが、日本人が書いたものだから面白くないだろうと思って、最後に読み始めたのである。読み終わると、この本が全ての本の中で最も素晴らしいと感じて、本を開くのが遅かったのを後悔した）

と言っている。林紓もこのように『不如帰』を読んだ感想を

「明知其為駕虛之談，顧其情況逼肖，既閱猶若斤斤於心」[13]
（これは虚構のことだとわかるが、物語が真に迫っているので、読んだ後も心に深く残る）

というふうに述べている。それから、

「國恥癡情兩淒絕，傷心怕讀不如歸」[14]
（国恥と痴情、どっちも極めて悲しく、心が痛いから「不如帰」を読めない）」

という詩句がその時代の中国で広範囲に流行していた。

2　近代韓国における『不如帰』の導入及び影響

『不如帰』が近代韓国に導入されたのは 1912 年、以下のような 3 種類の版本が出た。

趙重桓（1863 ～ 1964）が翻訳した『불여귀 (不如歸)』は、1912 年 8 月 20 日、訳者：趙重桓、発行者：福永文之助、印刷者：村岡平吉、印刷所：横浜福音印刷合資会社、発行

12　侗生 1909「雑纂欄」『小説月報』(3).
13　前掲［林紓、魏易訳 1981： 1］.
14　藏晖 1909「読小説絶句二：不如帰」『越報』(1).

所：東京警醒社書店、発売元：朝鮮京城織居商店、総売捌所：朝鮮京城三光組、売捌所：京城東洋書店・韓盛商会・匯東書院・美円商店・普及書館・其他京郷有名各書店、定価：45 銭で刊行され[15]、三つの版本の中で最も影響が大きかった。また、彼が改編した演劇『불여귀 (不如歸)』は自分で設立した韓国人劇団「文秀星」によって 1912 年 3 月 29 日に上演された。

鮮于日（1880 ～ 1936）が翻案した『두견성 (杜鵑聲)』上巻は、1912 年 2 月 20 日、著作者：鮮于日、発行者：金容俊、印刷者：方熙栄、印刷所：京城普明社、発行所：京城普及書館、定価:30 銭で発行され、下巻は、1912 年 9 月 20 日、著作者:鮮于日、発行者:金容俊、印刷者：崔誠愚、印刷所：京城新文館印刷所、発行所：京城普及書館で刊行された[16]。もう一つの翻案作は、金宇鎭 (1897 ～ 1926) が翻案した『유화우 (榴花雨)』であり、1912 年 9 月 15 日、著作者：金宇鎭、発行所：京城東洋書院から刊行された[17]。

『不如帰』の翻訳者の趙重桓は 1903 年から 1906 年まで日本で留学していた。当時の日本は『不如帰』が大流行したので、その時から趙重桓が『不如帰』に留意したはずである。実は 1908 年から『不如帰』が韓国の日本人専用劇場で日本新派劇団によって日本語で上演され始めた。当時趙重桓は日本語が堪能で、『毎日申報』の記者であったので、韓国での日本演劇『不如帰』の上演から大きな影響を受けて、『不如帰』の翻訳と演劇化を通じて韓国に導入したいと考え始めた。その後、彼は小説『不如帰』の韓国語翻訳に着手して、それに基づいて演劇に改編・上演する準備も同時に進めていた。

『不如帰』が韓国に導入された後、大きな反響を引き起こした。『불여귀 (不如歸)』は、『무정（無情)』(李光洙、1917)、『장한몽 (長恨夢)』(趙重桓、1913）とともに 1910 年代における韓国の三大ベストセラーだと評価された[18]。演劇に改編された後も盛んに歓迎をうけ、上演が繰り返されている。1912 年度には四回も上演された。この作品は家庭小説の翻訳・翻案ブームの起点として、1910 年代の韓国文壇に大きな影響を与えた。小説と演劇を結合する模式を確立し、その後、それを模倣した『쌍옥루 (雙玉涙)』、『장한몽 (長恨夢)』など多くの作品が発表されている。きわめて稀であり、興味深いのは、外国のある作品に対して、一年内に翻訳本や翻案本が三種類も出たことである。近代韓国において、それほど『不如帰』の影響は大きかったのである。

15　趙重桓 1912『불여귀 (不如歸)』警醒社 , 奥付.
16　鮮于日 1912：奥付.
17　金宇鎭 1912：表紙.
18　최독견 1932：85.

Ⅳ　近代中韓両国の文学体制にみる『不如帰』の受容様相の比較

近代韓中両国は同じ時期に、似通った社会背景の中で日本の近代小説『不如帰』を自国に導入しただけではなく、自国で非常に大きな反響を引き起こした点では同じである。しかし、さらに深く分析してみると、実は近代韓中両国における日本近代小説『不如帰』の受容は多くの面で著しい違いを示している。本節では動機、内容、方式、階層などの視点から『不如帰』を受容する両国の違いを分析して、そのような違いが生じた原因についても考えて行く。

1　受容の動機：積極的に受容を進める中国、消極的に受容を進める韓国

まず、受容の動機から見れば、近代中国はとても自発的で、積極的に『不如帰』の受容を進めてきたが、近代韓国は自分の意志ではなく、ある意味で受容を迫られたと言っても良いだろう。

中国の林紓は強い意志をもって日本の『不如帰』を翻訳したのである。何故なら、この作品は

「夾敘甲午戰事甚祥[19]」（日清戦事をとても詳しく述べている）

からであった。日清戦争で日本に負けたことは近代の中国人、特に知識人たちに大きな刺激を与えた。林紓は愛国心が強く、それに自分の親戚の林少谷が甲午海戦で戦死したので、彼は特に敏感になっていた。日清戦争の実情をよりよく知った彼は、

「海上之惡戰，吾歷歷知之，顧欲言，而人莫信焉。今得是書，則出日本名士之手…今譯此書，出之日人之口」[20]
（海上の悪戦は私がよく知っている。そのことについて話したいが、誰も信じてくれない。私が手に入れたこの本は、日本の名士の手によって生み出されたものである。…今回訳したこの本は日本人の口から出た話をまとめたものである）

と言った。日清戦争の真相を中国全土の人に知らせる初志によって、林紓が『不如帰』を

19　前掲［林紓、魏易訳：1］.
20　同上 , P. 2.

翻訳し始めたのである。ここからわかるように、中国における日本『不如帰』の導入は完全に自身の意図によったことで、その過程には外部からの力の介入は全くなかった。

中国と大きく異なり、韓国における日本『不如帰』の導入はある力が加えられたもので、その際の日本の役割を無視してはいけない。1912 年に韓国で出版された三つの翻訳・翻案本はすべて、韓国が日本の殖民支配下にあるときに出版されたもので、韓国が自分の意思で行なったとは言い難いだろう。明治時代以降西洋の作品を翻訳し大量に受け入れて、翻訳の経験を積み重ねた日本は、その経験を生かして、自国の作品を積極的に海外に伝え始めた。『不如帰』を世界的に流行させるために、日本は苦心して、多くの力をかけた。例えば、『不如帰』最初の英語訳本 Nami-ko（1904 年）は日本の塩谷栄によって翻訳されたものであった。韓国語の訳本も日本版『不如帰』の海外翻訳・出版企画の一部として進められたようである。韓国における日本版『不如帰』の翻訳や出版は中国の場合と違って、単純に日本文学を伝えるものとして見ることはできない。日本が明確な目的を持って推進した結果で日本の積極的な介入があったと考えなければならない。同時代の他の作品と違って、趙重桓が翻訳した小説『불여귀 (不如歸)』の印刷と出版を担当したのは東京の出版社警醒社である。それからソウルの織居商店を通して発行・販売し、総売別所、東洋書院、韓勝商会、匯東書館、美円商店、普及書館など主要な書店を通じて韓国全土に流通網が作られた。さらに、朝鮮総督府機関紙の『毎日申報』[21] でも積極的に広報された。これらのことは趙重桓個人の力では到底成し遂げることはできない。もう一つの証拠は、『불여귀 (不如歸)』の出版を担当したのは東京の警醒社、印刷を担当したのは横浜の福音印刷合資会社であり[22]、即ち、韓国語訳『불여귀 (不如歸)』はまず日本で発行・印刷され、その後韓国に輸送され、韓国で流通したのである。ここからも、日本の介入が実際にあったと推測できる[23]。

1910 年代の韓国は日本の植民地になったばかりで、当時の日本は自国の政治支配理念を韓国に植え付けようとしていた。1912 年の『不如帰』の導入を起点として、日本は自国の家庭小説を大量に韓国に導入させようとしたため、韓国の新聞社はそれらの連載を増やし、出版社も多くの小説を出版したため、韓国では「家庭小説ブーム」という現象が起こった[24]。しかし、その大部分は日本作品の翻訳本や翻案本であった。日本が家庭小説を韓国

21　1912『毎日申報』, 10/02-11/16.
22　前掲趙重桓『불여귀 (不如歸)』奥付.
23　［윤민주 2007：35］.
24　［권정희 2007：203］.

に導入したのは、その中に含まれる天皇制や家長制などの政治支配理念を韓国民衆に間接的に受け入れさせるためである。内容を分析してみれば、『不如帰』は多くの家庭小説の中でも、天皇を頂上とする家長式国家支配体制を体現する代表作として分類される。従って、日本は『不如帰』の韓国への導入を非常に重んじていた。『不如帰』の導入を担当した韓国作家の趙重桓は、ある意味で、「選ばれた」者だと言えるだろう。韓国の日本語学校で教育を受けて来た趙重桓は、日本語によく通じていたし、親日的な『毎日申報』の記者であったため、日本当局からしてみれば、趙重桓が「内地（日本）」の理念を含んでいる『不如帰』を翻訳するのに適していると考えたのである。

受容の動機の点で、近代中韓両国にこのような大きな違いが出たのは、両国の歴史と関係がある。1908年の中国は、民族危機や半植民地化が深刻だったが、清の統治がまだ終わっておらず、独立国なので、文学界は自身の意志によって、外国文学の導入をするかどうか決定できる状況にあった。1912年の韓国は、すでに日本の植民地になっていて、メディアや出版社などはすべて日本当局から制限を受けており、完全に自身の意志で外国の文学を受け入れることができない状況であった。

2　受容の方式：翻訳を偏重する中国、翻案を偏重する韓国

『不如帰』を自国に受け入れる方式を見れば、近代の中国は翻訳のほうを偏重し、韓国は翻案のほうを偏重していた。翻訳と翻案[25]は、外来文学を受け入れる時使われる二つの異なった方式である。

日本の『不如帰』を導入した時、出版された版本は、中国では林紓が翻訳した『不如歸』しかなかった。中国の林紓は訳述という方式を使った。細部では原作とは少し異なる点もあるが、やはり翻訳と見なせる。

韓国では３種類の版本があるが、翻訳を使ったのは趙重桓の『불여귀(不如帰)』しかない、鮮于日の『두견성 (杜鵑聲)』と金宇鎭の『유화우 (榴花雨)』はすべて翻案の方式を採用したものである。

では、どうして近代中国は翻訳を偏重し、近代韓国は翻案を偏重したのだろうか。その理由は、まず両国の文学伝統にある。中国の長い文学史の中では、「翻案」の現象は少し

25　ここにまず翻訳と翻案の差異について説明しておきたい。翻訳と翻案は外国原著の粗筋を留めているという点では同じであるが、翻案は原著の登場人物や舞台を自国の人物や舞台に変更する。“번안소설은 원작을 바탕으로 하되 등장인물이나 배경 등을 한국의 상황에 걸맞게 고쳐 옮긴 소설을 가리킨다（翻案小説は原作を基盤とするが、登場人物や背景などを韓国の状況に合うように変更した小説を指す）.”［박진영 2007：1］

見られたが、「翻案」という文学伝統になることはできなかった。この点について、

「在东亚翻案文学当中，中国文学往往是日本、韩国翻案文学的底本，日韩翻案文学总是以中国文学为底本创作的。中国也有翻案文学，主要是佛教文学的翻案作品。佛教故事的翻案对于中国小说的形成和发展产生过重要作用。然而中国文学的翻案现象远不如韩国、日本那样盛行。」[26]

（東アジアの翻案文学の中では、中国の作品が日本と韓国の翻案文学の底本になることはよくあった。日韓の翻案文学は中国の作品を底本として創作されてきた。中国でも翻案文学があったが、それは主に仏教文学を翻案したもので、仏教の物語の翻案が中国の小説の形成と発展に大きな影響を与えた。しかし、中国文学の中の翻案の現象は日本や韓国ほど盛行できなかった。）

と言うふうに、東アジア比較文学学者張哲俊が既に指摘している。でも、韓国の文学史の中で、翻案は一つの重要な伝統である。例えば、中国の古典名著の『三国演義』（明朝初期）は、韓国で繰り返し翻案される対象になってきた。他には、『蘇大成伝』（朝鮮後期）、『張翼星伝』（朝鮮後期）、『張豊雲伝』（朝鮮後期）などの韓国古典小説は、中国の『薛仁貴伝』（北宋初期）をまねて書かれたものである。韓文小説『明砂十里』（朝鮮後期）は中国の元曲の『趙氏孤児』（元朝）に基づき、『東廂記』（朝鮮後期）は中国の『西廂記』（元朝）に基づいていて、『月峰山記』（朝鮮後期）は中国の『太平広記』（北宋初期）を基づいて翻案されたものである。中韓両国は近代に入ってから、日本や西洋の小説を導入し始める時、それぞれの文学伝統の「慣性」によって、中国は翻訳を偏重し、韓国は翻案を偏重することになったと思う。『不如帰』はその中で、とても典型的な例だったのだろう。

3　受容の内容：「集団叙事」・厳粛性を強化する中国、「個人叙事」・娯楽性を強化する韓国

日本原著『不如帰』は「集団叙事」と「個人叙事」で有機的に構成されている作品である。「集団叙事」というのは、国家（近代日本）や対外戦争（日清戦争）に関する叙事で、作品の中で非常に重要な部分である。「個人叙事」というのは、主に主人公の武男と浪子のラブストーリーや家庭に関する叙事で、彼らの個人的な運命は国家や戦争などの「集団叙事」によって決まっている。

26　张哲俊 2004：366.

日本原著『不如帰』の中では、「集団叙事」と「個人叙事」を同等に重んじて、どれでも重要な構成である。でも、近代中韓両国に導入された時に、中国は原著の「集団叙事」のほうを重要視し、韓国は原著の「集団叙事」を弱体化させながら、「個人叙事」を強化した。

近代中国は『不如帰』を受け入れた時に、原著の「個人叙事」を無視するのではなかった。しかし、「個人叙事」よりも、原著の「集団叙事」のほうをずっと重要視して強調した。中国訳本の序文は、千字あまりしかないのに、序文のラブストーリーがとても感動的だと簡単に言及した後、序文の最後まで、作品の中の日清戦争に関する内容を紹介したり、自分の観点を述べたりしていった。例えば、

「其中夾敘甲午戰事甚祥」
（この作品は日清戦争をとても詳しく述べている）
「日為叫旦之雞，冀吾同胞警醒」
（時を告げる朝の鶏になって、同胞を目覚めさせたい）

と言った。この序文から、近代中国は『不如帰』を導入した時に、最も興味を持っていたのは作品の「集団叙事」であり、「個人叙事」ではなかったということがわかる。訳本の中で、日清戦争に関する件（特に第十八章鴨緑之戰、第十九章戦余小記、第二十三章記旅順口事、第二十四章武男帰朝）になったら、括弧で自身の感想や評論を頻繁に加え入れた。例えば、

「是時吾國之船為敵國炮的矣」[27]
（この時、我が国の船が敵の大砲の標的になってしまった）
「足見日本人心上下如一」[28]
（ここから見て、日本人は上も下も心が一つだということが分る）
「此為中國之恥也」[29]
（これは中国の屈辱だ）

というふうに言った。それに、ある章節の後に、「林紓が曰く」という形式でさらに長い

27　前掲［林紓・魏易訳 1981：79］.
28　同上 , P. 81.
29　同上 , P. 101.

感想文や評論文を付けた。このようなところからも、中国の訳本では、さらに注目されたのは、武男と浪子のラブストーリーではなく、戦争や国家などの「集団叙事」であるということが分かる。序文での林紓の強調や、訳文での林紓の評論の挿入を通じて、『不如帰』の「集団叙事」は中国に導入されてから、更に強化されるようになって、中国の読者たちに作品の中の「集団叙事」の印象を更に深くさせた。

逆に、近代韓国は『不如帰』を受け入れた時、「集団叙事」を弱体化させた。三つの翻訳・翻案本は、序文を書いていない、本文にも林紓のように感想や評論を挿入していないので、国家や戦争などの「集団叙事」に対して、韓国の翻訳（翻案）者は何の言及もなし、彼らの態度が見えにくい。翻訳・翻案本の細部からも、「集団叙事」が弱体化されたのが分かる。例えば、原著は怪我をした武男は日本に帰って、第二師団が広島で集まっていたことを見た。そこで議員、兵士、記者、市民などが軍隊の出征のため、いろいろなことを急いで用意して、全民が戦争体制に動員されてしまった場面を詳しく描写された。でも、韓国の鮮于日が翻案した『두견성(杜鵑聲)』はこの場面を単純な自然環境の描写に変えた。以外には、原著の人物の対話の中の政治に関する内容に対しては、韓国は変更したり、削除したりした。また、韓国の『不如帰』テキストでは、原作の「戦争小説」の色彩や男主人公の軍人イメージを弱めようとする態度が読み出すことができる。上篇第４回、山木が浪子と武男の結婚で悲しんでいる娘を慰める場面：

日：「あんな屑屑した男に心中立て―それもさこっちばかりでお相手なしの心中立するより……」[30]

韓：「그까짓 다케오상 같은 일개 서생을 가지고 그렇게 괘념을 하지 말고」[31]
(武男さんのような一介の書生をそんなに一途に思わないで)

ここから見ると、韓国訳本では、海軍少尉の武男を「軍人」でなく、「書生」と言い、彼の軍人イメージを弱化する。ここからわかるように、近代韓国は『不如帰』を受け入れた時、原著の「集団叙事」を出来るだけ回避した。

一方、近代韓国は原典『不如帰』の中の「個人叙事」・娯楽性を強化した。韓国の翻訳・翻案本の人物のイメージは、原著より善と悪の二元対立がもっと著しい。女主人公の浪子を中心に、作中人物を「善人」と「悪人」に分けて、悪人に原著にない下品な言葉を言わ

30　徳富蘆花 2012：47.
31　趙重桓訳・박진영編 2006：51.

せ、悪人の悪いイメージを更に強化した。「善人」は原著で悪口を言っても、韓国の翻訳・翻案本になったら、弱化されたり、削除されたり、善人の良いイメージを損ねないようにした。また、原著『不如帰』の中の悪口はほとんど「馬鹿」で、単調な感じであるが、中国訳本では幾分軽く、オブラートに包まれているが、韓国訳本においては更に酷くて多様な表現が用いられている。原著の物語の通俗性と娯楽性を強化するか、弱化するかという中韓の訳者の意図とは、大きく作用しているのではないかと思われる。

韓国は『不如帰』を「集団叙事」を弱化し、「個人叙事」を強化したのは、その時期の政治環境によったことである。その時の韓国は、もう日本の植民地になってしまっていた。原作の中の日清戦争、天皇崇拝、民族主義などの「集団叙事」に対して、近代の韓国人はすごく敏感な認識を持っていた。鮮于日と金祐鎭は翻案という方式を使うことも、人物や舞台を韓国に変えて、韓国人に不快を感じさせる敏感な原著の内容を避け、もっと自由に書くことができたからである。『不如帰』は日本により、韓国に導入させられたものであるが、韓国の作家は、言語の転換をした時に、完全に日本の意図に従ったのではなく、制限された範囲で出来るだけ政治性を避けるようにしたのである。

4　受容の階層：中・上階層で受容を行う中国、全社会階層で受容を行う韓国

日本近代小説『不如帰』は近代中韓両国社会で流行し、反響が大きかった。でも、実は中韓両国でこの作品の影響を受けた社会階層は違っていた。中国では、『不如帰』を受け入れたのは主に知識のある中層と上層社会であり、韓国では、『不如帰』を受け入れたのは上から下まですべての階層であると判断される。地理的に見れば、中国社会に与えた『不如帰』の影響はより広いが、受け入れた社会階層を見れば、韓国社会に与えた『不如帰』の影響はより深かった。

このような差異が生じた原因は主に二つあると考えられる。まずは、近代中韓両国はそれぞれ違った文体で『不如帰』を受け入れたからである。原著の『不如帰』の文体は「雅俗折衷体」であるが、中国は「雅」の文体で翻訳し、韓国は「俗」の文体で翻訳・翻案したのである。近代中国は清末の時から文体を改革し始め、より簡単な「白話文」を提唱していたが、「白話文」は五四運動（1919 年）後までに、中国社会で普及できていなかった。1908 年、林紓は民衆が理解しにくい文語体で『不如帰』を翻訳した。中国と異なり、『不如帰』を導入した時（1912 年）の近代韓国では既に文体改革（漢文—国漢文混用—韓文）を完成していたので、もう定着された韓文で、話し言葉に近い文体で『不如帰』を翻訳・翻案したのである。近代中国は普通民衆が知りにくい難しい文体を使い、近代韓国は普通

民衆が知りやすい簡単な文体を使った為、両国における『不如帰』の影響の範囲や程度の差異が生じた。近代韓国では、『不如帰』の影響が社会全ての階層に広く及んだが、近代中国では、『不如帰』が主に知識人階層の中で反響を引き起こした。

次は、近代中韓両国は『不如帰』を受け入れた時、演劇とどのくらい結合したのかというのも重要な原因になる。中国の林紓は『不如帰』を翻訳した時、演劇に改編する意識を持っていなかった。でも、韓国の趙重桓は『不如帰』を翻訳した時、それを演劇化する意識を持っていて[32]、小説の翻訳と演劇化の改編は凡そ同時に進めていた。小説は書面文本芸術であるが、演劇は舞台上演芸術である。小説と演劇は多く違っていて、それぞれの受け手も違う。演劇は視聴覚の効果を重んじて、人物の対話も話し言葉を多く使うので、普通民衆が受け入れやすくて、幅広い影響を与えることができる。近代韓国は小説と演劇を結合して『不如帰』を導入したので、韓国で与えた影響は中国よりもっと広くて深かった。

Ⅴ　結論（なぜ『不如帰』が近代東アジアで大きな影響を持ち得たのか）

以上で論じたように、『不如帰』が日本で発表されてから、近代の中韓両国に伝わり、東アジアで国境を越え、日中韓三国の読者によって広範に受容された。その原因は、まず『不如帰』の時代性が強いことが挙げられる。作品の叙事背景である日清戦争（中日甲午戦争）は日中韓三国に関わる重大な歴史事件なので、三国の読者たちは『不如帰』に対して共通の興味を持っていたのである。作品の中の姑嫁関係、母子関係、夫婦関係、婦女解放問題など様々な伝統的家族倫理問題は、儒家文化伝統を共有する東アジア三国が近代に入って西洋文化と接触し始めた時、必ず向き合わなければならない共通の課題である。また、『不如帰』は韓中両国の文学伝統に合っているのも重要な原因である。例えば、『不如帰』は中国の古典名作『孔雀東南飛』（東漢末期）の叙事模式とよく似ている[33]。「恨」の文学伝統[34]を持っている韓国読者にとっても、『不如帰』は共鳴しやすい作品なのである。

32　趙重桓の友達、韓国の近代小説家尹白南の追憶（윤백남 1934「조선연극운동의 이십년전을 회고하며）『극예술』,P19）によると、趙重桓は1911年の始め頃から『不如帰』の翻訳を着手した。それから、趙重桓が改編した演劇『불여귀（不如帰）』が韓国語で初めて上演されたのは1912年3月、翻訳本『불여귀（不如帰）』が出版されたのは1912年8月であった。これらの時間から、小説の翻訳と演劇化の改編は凡そ同時に進めていたことがわかる。

33　［楚永娟 2010］によると、『孔雀東南飛』と『不如帰』は、若い女主人公が結婚してから姑に虐められ、最後に離縁を強いられ、男主人公との愛情が引き裂かれてしまたという点で同じ物語の構造を示している。

34　歴史学者古田博司は朝鮮文化における恨（ハン）を「伝統規範からみて責任を他者に押し付けられない状況のもとで、階層型秩序で下位に置かれた不満の累積とその解消願望」と説明している（古田

以上の考察からみると、『不如帰』は東アジア文学史、或は東アジア文化史上で非常に重要な作品だと結論を出せるだろう。『不如帰』に対する考察は、近代東アジア三国間の文学関係を把握する点だけではなく、三国の文学と文化の共通性と異質性を理解する点にも大きな価値があると考える。

参考文献

一次文献（国別順）

徳富蘆花作　1903『不如帰』民友社 .

徳富蘆花作　2012『不如帰』岩波文庫.

林纾・魏易訳　1914『不如归』商務印書館 .

林紓・魏易訳　1981『不如歸』商務印書館 .

趙重桓訳　1912『불여귀 (不如歸)』警醒社 .

趙重桓訳・박진영編　2006『불여귀 (不如歸)』ソウル：報告社.

鮮于日　1912『두견성 (杜鵑聲)』普及書院.

金宇鎭　1912『유화우 (榴花雨)』東洋書院.

二次文献

日本語文献（五十音順）

伊狩章　1965「『金色夜叉』と『不如帰』」『國文學：解釈と教材の研究』10 (5), 55-61.

円地文子　1956「『不如帰』の主題」『文学』(08), 949-952.

神田重幸　1987「『不如帰』――夫婦愛 , その理想と悲劇――」『国文学解釈と鑑賞』52 (10), 44-46.

神立春樹　1991「徳富蘆花『不如帰』における時代描写」『岡山大学経済学会雑誌』23 (1) , 27-53.

木村功　2008「徳冨蘆花『不如帰』――反転する悲劇国文学――」『解釈と鑑賞』73 (2), 18-25.

博司 2005『朝鮮民族を読み解く』筑摩書房 ,P150)。なお、「恨」は韓国文学の大きな美学特徴として認識されている（崔雄権 2009「試論韓国朝鮮文学的概念及其文化審美特徴」『東疆學刊』26. P. 3)。『不如帰』の強い悲劇性と韓国の前代文学の「恨」の審美伝統に共通するところがある。

権丁熙　2001「海峡を越えた「国民文学」——朝鮮における「不如帰」の受容をめぐって——」『日本近代文学』2001 (65), 30-43.

康東元　2004「清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介——日本文芸の中国における受け入れ方——」『図書館情報メデイア研究』02 (01), 1-12.

洪善英　2002「德富蘆花『不如帰』と韓國の飜案小説との比較考察」『日語日文學研究』2002(43), 65-82.

佐藤嗣男　1987「紅葉と藍花——『金色夜叉』と『不如帰』——」『文学と教育』(139).

高橋修　2007「『不如帰』の結末——「征清戦争」をめぐるメタファー——」『共立女子短期大学文科紀要』, 19-29.

樽本照雄　2009「 清末民初の翻訳小説と日本」『図説翻訳文学総合事典』(5).

中村忠行　1957「『不如帰』の中国に於ける評価」『明治大正文学研究』(23), 26-32.

原口敬明　1992「『不如帰』考——社会史的考察——」『社会文化史学』, 1-16.

布川純子　2000「德富蘆花『不如帰』」『成蹊人文研究』8,1-12.

藤井淑禎　1990『不如帰の時代』名古屋大学出版会 .

藤井淑禎　1991「『不如帰』德富蘆花——戦争と愛と——」『国文学解釈と教材の研究』36 (1), 61-63.

福田準之輔　1961「蘆花文芸の特質——『不如帰』を中心にして」——」『日本文芸研究』13 (1), 37-50.

渡邊拓　1995「『不如帰』についての二 , 三の視点」『論樹』1995 (9), 1-16.

中国語文献（拼音順）

陈凌虹　2008「论『不如归』与『家庭恩怨记』的情节剧特征」『戏剧艺术』(04), 41-55.

方长安　2003『选择・接受・转化——晚清至 20 世纪 30 年代初中国文学流变与日本文学关系——』武汉大学出版社 .

付立波　2006「近代中国人翻译的人文社科类日文书籍」『上海高校图书馆情报工作研究』(02), 51-54.

付建舟　2009「清末民初日语文学的汉译与中国文学的现代转型」『外国文学评论』(04), 151-162.

胡適　1923「五十年来中国之文学」『申報』特刊 .

江川澜　2011「畅销书『不如归』的背后故事」『深圳特区报』01 (25).

劉海玲 2012「中日文学中悪魔婆婆形像之比較——『金鎖記』的然曹七巧与『不如帰』的慶子為中心——」『作家』(20), 124-125.

夏敏　2006「『不如归』在中国的译介」『语文学刊』(01), 121-123.

张哲俊　2004『东亚比较文学导论』北京大学出版社 .

章艳著　2011『在规范和偏离之间——清末民初小说翻译规范研究——』北京教学与研究出版社 .

周作人　1918「日本近三十年小説之発達」『新青年』05 (01).

楚永娟　2010「生命的挽歌——『孔雀东南飞』和『不如归』的婚姻悲剧比较——」『名作欣赏』(17), 114-116.

邹波　2009「林纾转译日本近代小说『不如归』之底本考证」『复旦外国语言文学论丛』(02), 123-129.

邹振环　2008『影响中国近代社会的一百种译作』中国对外翻译出版公司 .

王凌　1986「晩清日本文学翻訳論考」『日本学刊』1986 (05), 54-59.

王向远　2001『二十世纪中国的日本文学翻译史』北京师范大学出版社 .

韓国語文献（ハングル字母順）

권보드래　2003「한국 , 중국 , 일본의 근대적 문학개념 및 문학어 형성」『大東文化研究』(42), 373-404.

권정희　2003「도쿠토미 로카［德富盧花］『호토토키스［不如歸］』의 번역과 번안」『민족문학사연구』(2), 223-253.

권정희　2007「日本文學의 飜案」『아시아文化研究』(12), 203-230.

권정희　2008「언어의전환과서사의분기 -『두견성』과『불여귀』」『大東文化研究』(64), 383-414.

권정희　2011『『호토토기스』의 변용 : 일본과 한국에서의 텍스트의 번역』소명출판 .

김병철　1976『韓國近代飜譯文學史研究』서울 : 을유문화사 .

김순전　1998「韓日近代小說의比較文學的研究」翰林大學校博士論文 .

문한별　2010「國權喪失期를前後로한飜譯및飜案小說의變貌樣相 : 敍述方法의 變化를中心으로」『國際語文』(49), 55-82.

박진영　2010「韓國의近代飜譯및飜案小說史研究」延世大學校博士論文 .

신근재 1989「『불여귀 (不如歸)』의번안양상 :『사견성 (社鵑聲)』과『유화우 (榴花雨)』를 중심으로」『日語日文學研究』15 (01), 55-83.

윤민주　2007「『불여귀』에 대한 비교문학적 연구」경북대학교석사논문 .

전은경　2006「1910 年代飜案小說研究」慶北大學校博士論文 .

（神戸大学大学院人文学研究科）